

---

---

## 日本映像民俗学の会 研究会

---

---

### ●民族誌映像作品を見る●

#### 60年代に撮られた映像

【Dead Birds】 1963 83min. Made by Robert Gardner

【The Nuer】 1970 75min. Made by Hilary Harris and G. Breidenbach

日本語付き・牛島巖解説

日時: 12月15日(金):午後5:30~8:30

場所: 四谷区民センター内、四谷地域センター11階 集会室4

会場借用費: 一般500円 学生400円

定員:25名 申込者優先([info@jefs.org](mailto:info@jefs.org) F:03-3352-2293)

◎上映終了後、恒例の忘年会をおこないます。(会費3000円以内)

会誌「映像民俗学」6号、特集「朝鮮植民地と映像」ができましたので、お渡します。

### 上映作品

①Dead Birds 1963 83min. Made by Robert Gardner

60年代初期の民族誌映画。ロバート・ガードナーはハーバード大学ピーボディー博物館のフィルム研究センターで、ジョン・マーシャルと共に「狩猟者たち」の制作にたずさわった後、ハーバード・ピーボディー調査隊に参加した。イリヤン・ジャワの高地のバリエム谷に住むダニ族は、1938年に発見されたが、60年代に至るまでよく知られていなかった。調査の最初の5ヶ月間の撮った映像をもとに、この作品をつくった。「死せる鳥たち」は、1962年のハーバード大の調査の間に起こった実際の事象を記録したものであり、部族間の戦闘と葬祭儀礼の様子が映し出され、フラハティの伝統を継ぐ。

ガードナーのフィルム撮影は、旧式なもので(同時録音装置がつかない撮影機を使用)、映像の表現力の大半は、映像編集のしかたと解説から生まれたものである。Grand Valleyの5ヶ月の間に起こった戦闘という事象に従って、彼は、Weyakが帰属する集団の少年が敵に殺され、最後には敵の一人を殺すことで均衡を回復する、というストーリーを構成した。ガードナーの羅針盤というべきものは、彼自身の感性にあって、それを死とむきあうという万人共通の主題をフィルムの形で表明したともいえる。この映画は多くの点で民族誌映画の分岐点となった作品である。まずは、最初の俯瞰撮影で地理的な全体が示されていることに注目して下さい。

## 【ナレーションの要旨】

〈前半〉 ダニ族は「すべての男は、鳥のように死ななければならない」ことを知っている。これが彼らのアイデンティティや日常生活を形作る信仰である。Wayak はダニの戦士であり農民である彼の村は30の村と小道と菜園で結ばれている。各村は親族関係者で構成される。村を一步出るとそこは敵との境界地帯――誰のものでもない土地、戦場――である。戦場の両脇には一列の櫓が組んであり、毎朝、両者の戦士が櫓で登り、見張りをする。Wayak も交代で村の見張り台に登る。彼が櫓で見張りしている間、妻は畑仕事、子供は家畜の世話か、戦争ごっこをしている（映像構成において、男たちが戦闘をしている間、女たちはそれに無関心にサツマイモ畑で仕事をし、あるいは塩づくりの作業をしている）。

2週間前、Wayak 達が敵の一人を殺したので、敵は復讐を終えないと心が休まない。ダニ族の戦争は領土を奪い、捕虜をとり、略奪するものではない。殺された者の霊魂に対する義務のためにする。復讐がなされると死者が病気、不幸、災難をもたらすからである。

このためにこそ戦闘が起こる。殺された仲間の霊魂に対する復讐をとげるまで、村人は霊的にも衰えている。人は種の形をした霊魂を持っている。人が生まれたときにこの種が鳩尾に植え付けられる。この種は子供が歩いたり、話したりするまでは芽を出さないが、子供の成長とともに大きくなる。これらの種、霊は特に友人や家族の死に対して敏感である。これと反対に敵を殺すことは霊を強化し、高揚させる。（一人殺して復讐が遂げられると戦闘はとりあえず終了する。あるいは鏃についた槍は使用しないなどある規則に沿った戦闘であるので、儀礼的な意味が含まれている戦闘とみることができる。（道徳的心情のための戦闘）

双方の戦士が櫓に昼間にいる時は、敵に襲撃はないと見てよい。襲撃を成功させるためには無防備な処に不意打ちしなければならない。夜は戦うことがない。霊魂が人の生命を支配している。霊魂の活動が盛んな夜には、人は家から外に出ない。

〈後半〉 数日間、戦場で小競り合いがあったが、死者が出ない。2－3週間後に、敵は、Wayak の村の子供を殺すことで復讐を遂げた。敵は戦勝に酔いしれている。他方 Wayak の村では子供の葬式が行われる。子供を椅子に腰掛けさせ、貝バンドが子供に懸けられ、その後貝バンドは家族や親戚に分配される。（なを、映像を通じて Wayak がこの貝バンドを製作している場面が挿入されている）ついで、子供を椅子からおろし、火葬用の積んだ薪の上に安置する。霊魂を解放するために彼の頭上に矢を放つ。火葬後、骨は集められ、両親の家に納められる。

翌朝、Wayak は櫓に登る。彼は、敵が子供を殺した場所を見下ろし、戦場のかなたでは敵はまだ戦勝と霊魂の解放を祝っている姿が見える。再び、均衡を取り戻さなければならない。次は Wayak と仲間が復讐する番である。そして、2－3日後、ことがなされ、今度は Wayak の村でにぎやかに復讐の成功を祝うのであった。

人は鳥のように死なねばならない。しかし、ひとは自らの運命を知りながら、人生への熱い思いを抱いている。ただ、ひとは死を待っているのではなく、自らの腕力で運命を切り開く。彼らは自らの魂の解放に敵を殺す。

この解釈は、3年間の調査の結果が十分に反映されておらず、異論も出ている。

ダニ族の生活と死：緊張(敵の襲撃を待つ)とリズム(日常の生活)を提示した古典的な作品である。しかし、編集上の distortion(現実の表現のゆがみ)を理解しておく必要がある。

継続性をつくりだす編集：戦闘シーンは、時と場所を異にするシーンを繋いで一つのシクエンスにまとめている。ガーデンナーは、かくの如きがダニ族の戦闘であることを示す、最良の絵である、と述べる。

戦闘場面と、女性が塩つくりの小川に行く場面を交互に編集している。これは、男たちが戦闘をしている間、女たちはそれに無関心にサツマイモ畑で仕事をし、塩つくりの作業をしていること、を示す。このようなことがあり得る、とガーデンナーは判断したのだ。

## ②The Nuer (1970) 75min.

**Made by Hilary Harris and G. Breidenbach with the assistance of Robert Gardner.**

Harrisは、モダンダンスやバレエの映像に関心があった。この映像はThe dance of Cattleともいえる作品である。ヌエルの歌と詩を織り交ぜた美しい映像である。映像は、エバンス＝プリチャートの「ヌア族」1章に相当し、背の高いヌエル人と家畜がおりなすリズムとペースが、そして同期された牛と人の動きが描写されている。エバンス＝プリチャートの記述を補完する作品として教室で使用される価値はある。

始めの場面で、この当時としてはめずらしい老人へのインタビューが挿入されている。

### <老人とのインタビューの内容>

「我々は常に家畜を持つ。神が与えてくれた。家畜は父から息子に受け継がれる」

「牛はすべてを与えてくれる。牛は我らの幸運である。神の助けを必要とするときは、牛を犠牲に捧げ、豊かな草を願い、恐ろしい病気を防ぐ」

「草の神に犠牲を捧げ、招き、新しい生命を願う。我々ヌエルは牛を殺さない。犠牲にするときだけ殺す」

「少年が大きくなると、マークをつけなければならない。額に傷痕をつけないと、大人になれない。我々の習慣で、これで強い男になる。そして、父から雄牛を貰い、それにちなんで新しい名前をつける」

婚姻をめぐる紛争、天然痘を治癒する共同儀礼、御祓い儀礼そして最後のガル儀礼(成人式)などの事象が、挿絵的に構成されているが、断片的で、継続性に欠け、美しいが映像であるが、民族誌としての統合性がない。

例えば、最後のガル儀礼は、二人の少年が額に傷をつけて大人になる儀礼の記録であるが、分離、過度、統合からなる通過儀礼の構造、あるいは子供から成人に移行を社会的に認知する局面は描かれていない。

あるいは、女性がトウモロコシを杵で突く光景では、そのリズムが示されており、カメラ

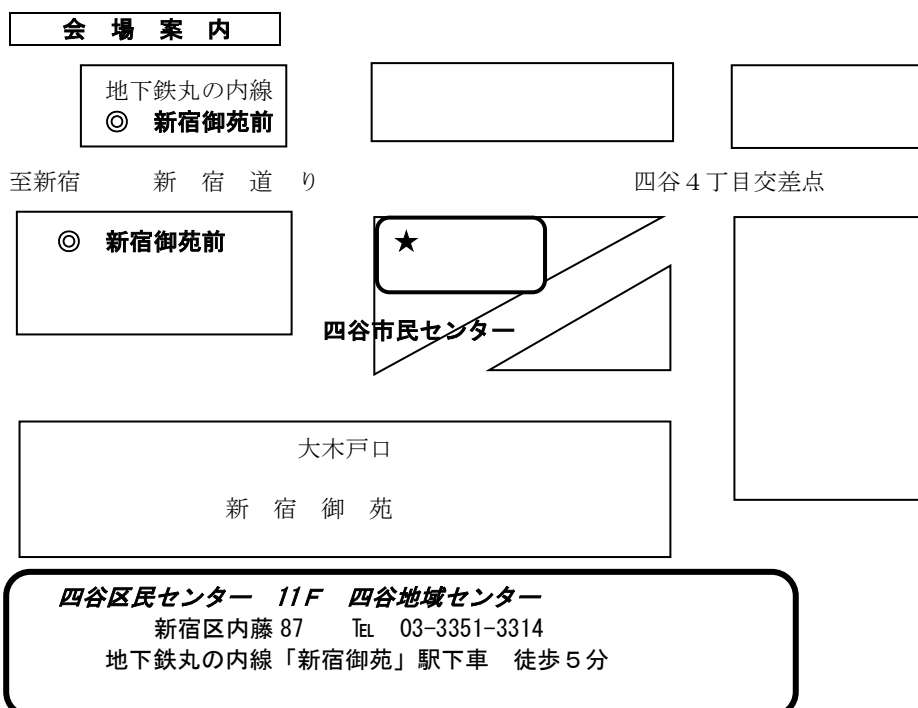
ワークによる映像的な面白さはあるが、手、足、顔のクローズアップで構成され、身体全体の動きが把握できない。

他方、種々のパイプ、象牙の装飾品 傷痕模様を短いショットで見せるなど、映像による一般化の工夫が試みられている。

「The Nuer」は、アフリカの牛牧畜民の生活のリズムが、よく示された作品といえよう。

## ●上映会場

交通： 地下鉄丸の内線「新宿御苑前」下車 徒歩5分 (地図参照)



---

日本映像民俗学の会事務局  
〒160-0014 東京都新宿区内藤町 1-10-201  
Tel 03-3352-2291 Fax 03-3352-2293  
E-mail info@jefs.org

---